

◆病院の理念◆

社会のニーズに応える安全で質の高い医療を皆様に提供するとともに良識ある人間性豊かな医療人を育成します。

がん治療に対する取り組み

シリーズ⑤
がん登録さまざまな場面で活用されるがん登録
～国で、都道府県で、病院で。そして患者の皆様のために～

診療情報管理室 松本 吉史（診療情報管理士）

1) がん登録をご存知ですか？

2人に1人はがんになるといわれ、厚生労働省の統計によると、死因の第1位はがんです。がん登録は、がんの罹患（病にかかること）や転帰（最終的にどうなったか）という状況を把握するために、各病院が診断・治療などの情報を登録しています。今までは都道府県単位の情報にとどまっておりましたが、平成28年（2016）に「がん登録等の推進に関する法律」が施行されたことにより、全国のがんの罹患や転帰を把握することができ、がんの罹患や治療効果などの把握が期待できるようになりました。

2) がんの対策に活かされています

がんにはさまざまな種類があり、がん登録の情報から、どのようながんが多いのかがわかります。わが国では、男性では胃がん、肺がん、大腸がん、女性では乳がん、大腸がん、胃がんの順にかかる方が多いです（2013年）（右図参照）。このことから、胃がん、大腸がん、乳がんのように、がん治療のみならず、早期発見・早期治療が可能ながんに対しては、がん検診を積極的に受診することが大切で、対策としても重要になります。同様に、肺がんでは「タバコを吸わない」「人のタバコの煙を吸わない」ことが大切で、これも対策として重要です。このように、がん登録の情報によって、いろいろ取り組まなければならないがんの対策で、どの取り組みの優先順位が高いのかが明らかになるのです。

3) 病院の診療の質の向上に活かされています

本院は、三島医療圏におけるがん診療の中核病院である「地域がん診療連携拠点病院」であるため、

法で定められた項目に加えて、診療や治療内容の情報の登録が求められる「院内がん登録」を行っております。登録された情報は、最終的には国の機関である国立がん研究センターで情報を集計し、施設ごとに公表されております。

当院では、大腸がん、膀胱がん、子宮がんの順に受診される患者さんが多く、大腸がん、膀胱がんは大阪府外から、子宮がんは大阪府内の患者さんが多く受診されています（2016年）。また、院内がん登録は、がんの種類別に登録を行っていますので、複数の診療科が関わることの多いがん診療では、診療科単位ではなく、診療の全体像や集学的治療の実績を把握できるツールとしても使われています。そういった情報に加えて、治療の転帰などを医療者が共有し、医学・医療の研究の基礎データとなり、さらなる診療の質の向上を目指しております。

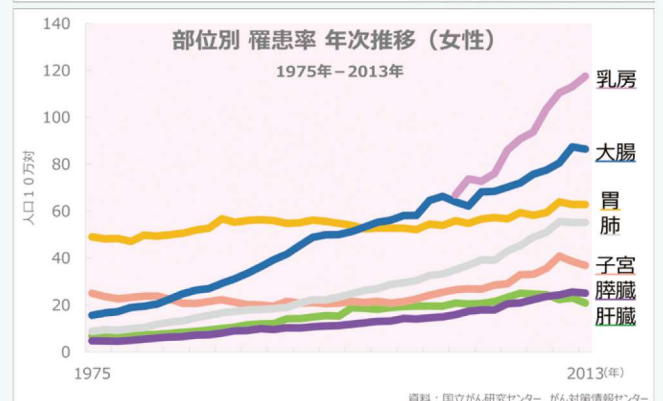
4) 患者の皆様が活用されるデータとして

がん診療の情報については、それぞれの病院（がん拠点病院や小児がん拠点病院）ごとに、国立がん研究センターが情報検索システムを開発し、ホームページ上で情報検索できるように公開されています。

<https://hospdb.ganjoho.jp/kyoten/> 情報検索システムは、がんの診療実績や種類、病院の名前などの条件より、がん診療に関する情報検索ができるようになっており、がん登録はその基礎データとしても使われています。とくに希ながん（希少がん）については、都道府県拠点病院の相談支援センター

に、希少がん検索システムが配備されており、がん相談の窓口でもがん登録の情報が使われるようになりました。

このようにがん登録の情報は、病院の実績や、医学・医療の発展への基礎データとしてだけでなく、国民への情報提供として利用されるようになりました。



JMAT 参加報告

災害医療チーム、倉敷市真備町へ

「平成30年7月豪雨」において、倉敷市真備町は50名以上の犠牲者と2,000棟以上の家屋全壊が生じました。中核病院をはじめ多くの医療機関も被災したため、JMAT（日本医師会災害医療チーム）の派遣が全国からあり、大阪医科大学も大阪JMATとして、発災から2週間たった7月20日から3日間、医師、看護師ら5名で活動しました。（写真左）。

現地では、被災した家屋の片づけ作業が行われており、住民とともにたくさんのボランティアが作業を行っていました。われわれが引き継いだ救護所（写真右）は、ボランティアセンターの中にあり、作業中に具合が悪くなったボランティアを診療するこ

とが主な業務でした。酷暑と呼ばれる記録的な暑さの中、屋外・屋内で作業を行うので、リーダーから事前に熱中症予防について注意をされていたものの、けいれんや意識が悪くなったりするボランティアが続出し、われわれが初期評価をして救護所で治療するか、救急車を呼ぶかを判断していきました。

病気やけがをした被災者を診療する救護班と違い、ボランティアなど支援者が安心して支援活動を行うための救護班であるわれわれの活動は、間接的に被災地への支援となったと実感しました。そして被災地の1日も早い復興をお祈りして、帰路につきました。



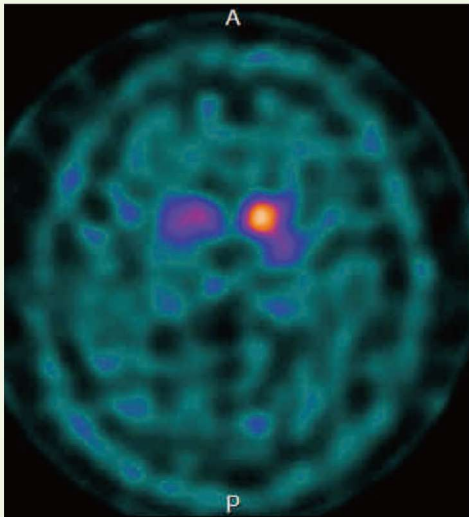
難病支援センター難病治療

パーキンソン病の新しい薬物



脳神経内科科長 荒若 繁樹

パーキンソン病の薬物療法に新しい薬が登場しました。パーキンソン病は、動作の緩慢に加えて、手足のふるえ、固さ、バランスの障害がでる病気です。これらの症状は、脳の中のドーパミン神経細胞が少しずつ減ることによって生じます。治療は、この不足したドーパミンを薬で補うことが主体になります。その中心となるのが、レボドパと呼ばれる薬剤です。また、このレボドパと似た構造をもつアゴニストと呼ばれる薬剤、レボドパの分解を抑制してレボドパの血中濃度を上げる薬剤(MAO-B阻害薬、COMT阻害薬)といったものがよく使われます。今回新しく登場したのはMAO-B阻害薬の1つでラサギリンと呼ばれる薬です。従来、セレギリンという薬剤が使用されてきましたが、ラサギリンは1日1回の内服で、原則的に初期から用量調節の必要がないといった特徴があります。また、1日の中で症状が悪化する“オフ”時間を短縮させる効果が示されています。海外の臨床研究では、早期に内服された場合、神経を保護する働きがあるのではないかとされています。このようにラサギリンは、パーキンソン病治療薬の1つとして、発症早期、またオフ症状が出てきた方において、症状を緩和する効果が期待されています。新薬なので処方日数に制限がありますが、当科では外来患者様にラサギリンを処方できる体制をとっております。薬物治療につきましてご質問がありましたら、お気軽に担当医にご相談いただければ幸いです。



パーキンソン病のドーパミン神経細胞減少を示すダクトスキャン像

病院ボランティアの活動紹介

～七夕まつり～
7号館1階エレベーターホールに笹飾り

「七夕まつり」は、本院ボランティアグループ「ふれあい」の季節の飾り・グリーン・折り紙ボランティアのメンバーが参加するイベントボランティア活動です。短冊を1,000枚作成し、6月25日から病棟20カ所に「短冊入れ」と短冊を配り、入院患者さんやそのご家族に願い事を書いていただきました。7月2日に短冊を回収し、七夕当日には804枚の短冊がボランティアの手により飾り付けられました。

たくさんの願い事が託された短冊は、三島南病院の短冊279枚と合わせて、三島鴨神社(高槻市三島江)で奉納し、お焚き上げをしました。皆様の願いが届きますように。



市民公開講座

平成30年6月16日開催

肺がんの最新治療
～分子標的治療・
免疫チェックポイント阻害剤を中心に～

内科学Ⅰ教室 呼吸器内科・呼吸器腫瘍内科助教 田村 洋輔



肺がんは患者さんの数が年々増加し、年間約11万人の方が罹患される「よくある病気」です。症状がでにくく進行してから発見されるケースが多いため、とくに進行した肺がんの患者さんに対する治療は重要です。近年、特に非小細胞肺がん(腺がん、扁平上皮がん、大細胞がんなど)では、進行がんに対する薬物療法の進歩は著しいものがあります。

1) 分子標的治療

同じ種類の肺がんでも個々の患者さんでがん化の原因になっている遺伝子異常は異なります(ドライバー遺伝子といいます)。肺がんではEGFR・ALK・ROS-1・BRAFの4つのドライバー遺伝子に対応した薬剤がすでに保険承認されており、遺伝子変化が確認できれば多くの方で進行がんを長期にコントロールすることが可能です。現在本邦では「がんゲノム医療」の整備が推進されています。ゲノム医療では、100を超える遺伝子を一度に調べることで個々の患者さんのがんの原因遺伝子を見つけ出します。すべての方で治療薬が見つかるわけではありませんが、有用な治療法がある場合もあります。現在本院でもゲノム医療の体制を整備中です。

2) 免疫チェックポイント阻害剤

人間には外敵を駆除するシステムである「免疫」があります。最近、がんは「免疫チェックポイント分子」という武器を利用して「免疫」から逃れ、生き延びていることがわかりました。免疫チェックポイント阻害剤は患者さんの免疫力をがんに向け抗がん効果を発揮する薬剤で、一部の患者さんで非常に強い効果を示し、場合によっては年単位でがんを長期にコントロールできることもあります。まだどのような患者さんでこの薬が効果を示しやすいのかはわかっていませんが、すべての患者さんが免疫をもっていますので、うまくいけば進行がんでも治癒を期待できる時代がくるかもしれません。

本院は、大学病院として更に効果の優れた治療方法の開発のために、治験や臨床試験も行っています。個々の患者さんに合った最良の治療を提供できるように今後も努力していきます。

看護スペシャリスト
専門看護師・認定看護師の活動

Part 16



患者さん自身で
療養生活の舵を切るための
支援を目指して

慢性疾患看護専門看護師
西原 望

呼吸とは、人が日々の生活を営むためのエネルギーを作り出す大切な働きです。私は在宅酸素療法看護外来や呼吸器内科病棟で、この機能を担う呼吸器に病気をもった方の療養生活の支援をしています。

そのような中で、外来に通院されている方々から「2階に上がれなくなって、洗濯物が干せなくなった」「風呂はいつもカラスの行水で、あがると息がとて辛いの」といった声を聞くことがありました。これらの訴えに対し、「何を大事に生活されているのか」「どのようにしたらゆっくり入浴が楽しめるのか」等、私はいつもその人の価値観を知り、心身の能力を見極め、その方の理想とする日常に近づけるような療養生活の提案に心がけています。また、このような療養生活の提案には、ご自宅や地域での生活をよく知る方々との連携も不可欠だと考え、主治医や地域で関わってくださる訪問看護師さんと連絡を取り合い、地域との協働を積極的に行っています。

今後も患者さんのお気持ちを大切に、患者さん自身で舵を切り、地域でその人らしい生活が送れるようにするための支援に取り組んでいきたいと思っています。

情報コーナー

高槻まつり

平成30年8月4日(土)開催された高槻まつり高槻音頭おどり連に、3年ぶりに本学のおどり連が参加しました。

当日、病院看護部を中心に編成されたおどり連は、午後6時50分ごろに松坂屋前を出発、ゴールの市役所前まで約500mを約30分間にわたり踊り歩きました。今年、高槻市は大阪北部地震に見舞われましたが、少しでもこの街に活気を取り戻したいと参加者たちは猛暑のなか奮闘しました。

